

ぼくのももだち

作・富田 求
(決定稿)

○登場人物

宮沢 健	(43)	契約社員
宮沢佳子	(37)	パート従業員
大地	(10)	小学5年生
最上 博	(43)	投資顧問会社経営
最上 薫	(42)	弁護士

教会の鐘が鳴る。

正面に光が見え始める。

静かに『いつも何度でも』が流れ始める。

窓から入る光。

十字架のように見える。

○宮沢家居間

十字架の光が宮沢佳子(37)に当たる。一人ぽつねんとソファに座っている。

膝の上には、一人息子の大地の着替えを入れたバックが乗っている。

のろのろと下着を入れ始める。

古い熊の人形『プー』を手にして

佳子「やっぱりこの人形を持って行った方がいいのかしら…」

熊の『プー』をジッと見つめる。

佳子「小さい時から一人の時が多かったから、大事なお友達…大

地、ずっと寂しい思いをさせてごめんね」

熊の『プー』をバックの中に入れる。

十字架の光が消える。

音楽フェードアウト。

暗転。

○同玄関前

自動車の音。

舞台中央にスポットライト。

最上薫(42)に突き出された最上博(43)が、スポット

ライトに入ってくる。薫も堂々と入ってくる。

博「俺は、気が進まないな」

薫「何を寝ぼけたこと言っているのよ！(博を小突く)あなたに

はこの事態の深刻さが分かってないの！」

博「分かっているよ。大地君が教室の窓から飛び降りたのが、和

彦のイジメが原因となれば大変なものな」

薫「他人(ひと)事のように言わないでよ！相変わらず無責任ね。」

いくら離婚調停中でも、和彦はあなたの息子よ。あなたにも責任があるんだから」

博「(感傷的に) やっぱり、俺は、和彦と一緒に暮らせないのか」

薫「自分から家を出て行きながら、今更何を言っているのよ」

博「誰もいない家に帰るのは寂しくて・・・」

薫「フン、週に一度の面会は認めてあげるわ」

博「養育費も払うのか」

薫「当然じゃない。和彦が成人するまで、養育費はきちんと払ってもらいます」

博「和彦に辛い思いをさせたな・・・」

薫「なにを感傷的なことを言っているの。和彦を守りたいなら、父親らしく対応しなさいよ」

博「騒ぎが収まるまで静観した方が、得策じゃないのか」

薫「これ以上騒ぎが大きくならないように、手を打っていくのよ」

博「まだ、十歳の子供なんだし、そんな心配しなくてもいいんじゃないのか」

薫「何も分かってないのね、今少年犯罪は厳罰化の方向なのよ」

博「和彦はどうなるんだ」

薫「イジメが原因となれば、まず児童相談所に通告されるわ。そうなるらとグループの中心にいた和彦はタダじゃすまないわよ」

博「児童相談所」

薫「悪質と判断されたら、家庭裁判所に送致されることもあるのよ」

博「裁判所! (事態の深刻さが分かる)」

薫「だから和彦の将来が懸っているのよ」

博「分かったよ。弁護士のお前の言う通りやるよ」

薫「大地君が教室の窓から飛び降りたのは、子供同士のケンカが原因だったのよ」

博「子供のケンカ? それで騒ぎが収まるのか?」

薫「イジメじゃなくて、子供のケンカなら、騒ぎは大きくならない。事件じゃなくて事故(強調)だったのよ。ケンカなら双方に責任がある。一方的に責められることはないわ」

博「ケンカ両成敗だもんな(少しホッとして)」

薫「そう、大地君の親が騒ぎ始める前に、納得させるのよ」

博「なるほど、さすが弁護士だな」

薫「そのために、係争中の案件が3件もあるのに、わざわざ来た

のよ」

博「ところで、真相はどうなんだ」

薫「フン、真相なんて関係ないわよ。裁判だって、勝った方が正義なのよ！」

博「弁護士のお前が言うと言説力があるな」

薫「クロをシロだと言いつい込めるのが、弁護士の仕事なのよ」

博「これは、これは、実に頼もしいお言葉ですな」

薫「ここは、正念場。負ければ和彦は、この事件の被告になってしまうのよ」

博「ああ、分かった」

薫「それじゃ交渉に行くわよ（博を突く）」

博「苦笑いして）交渉じゃないよ。お見舞いだよ」

薫「分かっているわよ」

薫自分に気合を入れて、スポットライトからアウトする。
自動車音。

暗闇。

薫、インターホンを押す。

ピンポーン。

舞台が明るくなる。

薫「（オフ）ごめんください」

○宮沢家居間

佳子「はい」

佳子がカーデガンを羽織って玄関に行く。

佳子「どうぞ」

薫と博が玄関に入ってくる。

博「失礼します」

薫「この度は息子をご迷惑をおかけして申し訳ありません」

薫・博深々と頭を下げる。

佳子「主人ももうすぐ帰ってくると思います」

博「どうも」

薫「失礼します。つまらないものですが、お納めください」

薫が、博にお見舞いの品を渡させる。

博「お口に合うかどうか。千疋屋のフルーツゼリーでございます。冷やしてお召し上がり下さい」

佳子「・・・お気遣いありがとうございます。ご存じのように、息子は入院していただきますので、今から病院へ行く準備をしておりました」

薫「本当にすいませんでした」

博「お忙しい中、申し訳ありません。少しお話が出来ればとお伺いしました」

佳子が二人ソファに案内し、ソファの上のバックを片付ける。

佳子「すみません。散らかっていますが、どうぞ」

佳子、見舞いの品を持ってキッチンに行く。

博と薫は、テーブルに置かれた大地のパジャマなどの着替えをぎこちなく見る。

見ながら二人ソファに座る。

居心地の悪いぎこちない間。

佳子が戻ってくる。

佳子「すみません。今片付けます」

佳子、テーブルの上の着替えを片付けてバックに入れる。

博「大地君の容体はいかがでしょうか？」

佳子「教室の窓から飛び降りて、足を捻挫して、頭も打ったようです。どうしてそんなことをしたのか・・・今から頭の精密検査なんです」

薫「大事がなければいいのですが」

佳子「幸い意識は、はっきりしています」

薫「よかった」

佳子「でも頭ですから、心配なんです」

佳子もソファに座る。

博「(頷きながら) まずは、息子さんの回復が第一ですから」

佳子「大地は、友だちの目の前で飛び降りたのですから、体だけじゃなく、心にも大きな傷を負ったと思います」

薫「成長期の子供だから、色んな友だち関係を経験して、成長す

るんだと思います」

佳子「傷つくのも、成長ですか」

博「まあ、子供のケンカですから」

薫「でも、十分な補償はさせて頂きます」

薫のスマホが鳴る。

薫「すみません。失礼します」

薫がスマホを持って、部屋の隅（下手）に行く

薫（声を潜め）もしもし、私だけど。今大事な話をしているの。後にくれない」

薫、佳子を気遣いながら電話している。

相手の話を聞きながら、徐々に興奮してきている。

薫（興奮して声が大きくなる）何言ってるのよ。向こうにだって責任はあるんだから」

博「おい、薫！」

博が薫を制止しようとする。

薫「何が十分な補償よ！」

博「止めろよ！（立ち上げる）」

薫「被害者だからと言って、大きな顔させないでよ！」
気まづい雰囲気。

博「すいません。女房は、今厄介な仕事を抱えているんです」

薫「事故の責任に関して、言質を取られるようなことは言わない
ですよ！絶対謝っちゃダメ！分かった」

佳子「・・・」

薫「今大事な事案の交渉中だから、もう連絡しないで。分かった」
「

薫スマホを切る。

薫「失礼しました」

佳子「事案、ですか・・・」

博「（佳子の反応を見て）こんな時に仕事の電話はするな！」

薫「（ソファに戻りながら）仕方ないじゃない。交通事故の示談交渉を抜けてきたのよ。まったく事務所のスタッフは使えないわ

ね」

博「息子の大事な時に」

佳子「(立ち上がってきっぱりと)あの、大地の怪我はやっぱりイジメが原因なんじゃないですか。あの臆病な子が、みんなの目の前で、教室の窓から飛び降りるなんて考えられません。息子の和彦にも確認しました」

薫「それに、大地君と和彦は、同じ仲良しグループだし、お友達じゃありませんか」

佳子「でも、最近痣を作って帰って来たりして、原因を聞いても自分で転んだと言って、謝るばかりだし」

薫「学校にも確認しました。イジメの事実はありません」

佳子「家で、学校の出来事を全く話さなくなってしまうって・・・」

博「小学5年生というのは、心も体も成長期の微妙な時期だし、色んな変化があったんじゃないですか」

佳子「わたしは、やっぱり学校で何かあったんじゃないかと心配なんです」

博「まあ、まあ、大地君が退院したら双方の言い分をじっくり聞きましよう」

佳子「(沈痛な面持ちで)大地に、もしものことがあったら、わたし・・・」

突然電話のベルがなる。

佳子ビクツとなり、電話の方へ向かいかける。

博が慌てて、自分のスマホ(電話と同じ着信音)を取り出す。

博「あ、もしもし、私だ」

声を潜めて話し出す。

博「今大事な話の途中なんだ。後にしてくれないか」

博、しばらく聞いている。

博「うん、うん、何？え！和解？何が和解だ！」

薫「あなた！」

佳子「・・・」

博「(段々興奮してくる)相手の事情なんか考えている場合か！こは攻めて、攻めて、攻めまくれ！(興奮して動作がオーバーになる)徹底的に相手の弱みにつけ込め」

薫「あなた！」

薫、博のスマホをやめさせようとするが、博はその制止を振り切って、携帯を続ける。興奮して、周りが見えない。

博「相手の言い分なんて聞くな！株の30%は押さえたんだ。強気でやれ！」

気まづい雰囲気。

博「この合併は企業価値を向上させると強気で説明しろ！」

佳子「(薫に)お二人とも、そんなにお忙しいなら、お引き取り下さい。私は、今直ぐにでも大地が入院している病院に駆けつけたいのです。是非話がしたいとおっしゃるから、お待ちしていたんです」

薫「(佳子に対して恐縮して)ごめんなさい。こちらからお時間を頂きたいとお願いしておきながら、失礼しました」

佳子「・・・」

薫「二人とも(博の方を見る)仕事のことになると、周りが見えなくなってしまうって(フツと溜息)本当に申し訳ありません(深々と頭を下げる)」

佳子「・・・」

博は興奮してスマホを掛け続けている。

薫「家の中でも仕事のことばかりで、いつもスマホをかけていて、まともな会話ありません。子供もゲームばかりで・・・親は、ケンカばかり・・・(溜息について)結局、離婚することになりました・・・」

佳子「失礼しました。お茶も入れないで」

キッチンに立つ。

薫が博に近づく。

薫「あなた、この場で仕事の連絡はないでしょう」

博「(スマホを切り)お前だってしてるじゃないか」

薫「私は緊急なんです」

博「俺もだ！今、何億の仕事をしているか分かっているのか！」

薫「偉そうなこと言わないですよ。あなたが会社を立ち上げた時、どれだけ助けたと思っているのよ」

博「会社が軌道に乗ったのは、お前のお蔭だと思っているよ」

薫がキッチンの方を気にしながら、博を部屋の隅に連れて行く。

薫「声を潜めて強く）息子の将来が懸っているのよ！イジメが原因なんて騒がれたら大変なのよ。ここは心証を良くしておかないと。だから忙しいのに、わざわざ来たんじゃないの」

博「納得しなかったら、どうするんだ」

薫「こうやって、両親揃って謝りに来て、話し合いの場を持った。

その事実が、係争になった時、有利に働くのよ」

博「お前、そこまで考えていたのか」

薫「何年弁護士をやっていると思ってるのよ。サツサと席に戻るのよ」

そこに、宮沢健（43）が突然帰宅する。

健「佳子！佳子帰ったぞ」

薫と博が、突然鉢合わせに驚く。

博「ワッ！」

健「お！」

健が二人を見る。

間。

佳子キッチンから戻る。

健「（佳子を見て）佳子、帰ったよ」

佳子「お帰りなさい。主人です」

博「・・・初めまして、最上です」

薫「この度は、申し訳ありませんでした」

健が二人を見て怒りだしそう。

戸惑っている二人。

健「（全身濡れて）いや、急に降り始めたものだから、ビチャビチャですよ」

佳子「健（たけし）さん（タオルを渡す）」

健は濡れた上着を佳子に渡す。佳子はその上着を奥に持って行く。

健「（体を拭きながら）すみませんね。お待たせして申し訳ない。

どうぞ」

健が二人をソファに案内し、自分も座る。
佳子がお茶を入れに戻ろうとする。

健「佳子、お前も座れ」

佳子「あのお茶を」

健「お茶なんかいい。大事な話なんだ」

佳子「はい」

佳子も健の隣に座る。

気まずく、ぎこちない間。

博、話し出すきつかけがつかめない。

健「あ、蚊がいる！」

パチン！健が急に膝を叩く。驚く二人。

健「(俗物的に) 半日仕事を休みましたよ」

博「それは申し訳ありませんでした」

健「しがないトラック運転手ですからね、半日休みは痛いです」

博「わざわざお休みを取って頂いて、恐縮です」

健「いや、うちのやつもスーパールのパートがあるし」

薫「休業補償の方も、考えさせてください」

佳子「・・・」

薫「息子さんの入院費用はもちろんですが、ご両親の休業補償も十分考えさせてもらいます」

健「少しは安心しました」

佳子「まだ検査の結果も出ていないんです・・・」

健「大地はどうして教室の窓から飛び降りたんだ」

佳子「本人も原因を言わないのよ。私はイジメが原因で、飛び降りたんじゃないかと心配で」

博「イジメがあれば、ご本人も話すでしょう」

健「まだ十歳ですよ。もしイジメがあったとしても、なかなか真相を話さないんじゃないか。親や学校に話したら、イジメは陰湿に、余計酷くなるんじゃないですかね」

薫「大地君と和彦は、同じ仲良しグループなんですよ。イジメなんてないですよ。事故の後、和彦に確認しましたが、イジメなんかはないとはっきり言っていました」

健「本人がいじめていたなんて言わんでしよう」

佳子「事実、大地はみんなの目の前で飛び降りたんですよ」

博「男の子にありがちな肝試しじゃなかったのかな」

佳子「肝試し？」

博「はい、自分も小学生の時よくやりました。どちらが高い所から飛び降りる勇氣があるか競争していました。いつも負けていましたけど」

健「いくら仲良しグループでも強要すれば、イジメになるんじゃないのか！」

薫「強要はなかったと思います」

健「どうして、強要はなかったと言い切れるんだ」

薫「学校も子供同士のケンカだと言っています」

健「学校なんて当てにできませんよ。元々責任逃れの隠ぺい体質があります」
頷く佳子。

健「ここはきちんと被害届を提出して、警察に調べてもらう必要がありますな」

博「警察！」

薫「警察なんてオーバーな。子供同士のケンカなんだし、大地君が退院したら二人から話を聞きましょうよ」

健「悪い検査結果だったらどうします」

佳子「悪い結果！頭も打ったみたいだし、後遺症でも残ったら・・・」

博「和彦もまだ十歳の子供なんです。なるべく穏便に話し合いたいのですが」

健「十歳といえば、もう分別のつく歳でしょう」

薫「一人息子なんで、甘やかして育てたようです」

博「二人とも働いているので、十分構ってやれなくて」

健「共働きはこちらも同じです」

佳子「大地には、ずっと寂しい思いをさせてきました・・・」

健「どちらにお勤めなのですか」

薫「私は弁護士をやっております。主人は会社を経営しております」

健「弁護士さんに、社長さんですか。それは、それは、画に描いたようなセレブなことだ。(自虐的に)うちは、女房がお決まりのスーパーパーのパートで、私はしがらないトラック運転手ですよ」
博「どちらにお勤めですか？」

健「城山運輸というちっぽけな会社ですよ」

博「へえ、城山運輸ですか。城山運輸は、規模は小さいけど、無借金経営の優良企業ですよ。うちの顧客としては、ナンバー3にはいりません。いい企業にお勤めですね」

健「いや、自分は、まだ契約社員なんですよ。なかなか正社員にはなれなくて」

博「社長の城山さんとは、昵懇の仲ですね。しょっちゅう食事して、投資の相談に乗っていますよ」

健「お宅は、どんな会社を経営なさっているのですか」

博「え、はい、投資顧問会社を経営しております。年商はまだ10億程度ですが、取引先は城山運輸のような優良企業ばかりですよ」

健「10億・・・えん、ですか・・・」

博「10億円なんて、たいした規模じゃありません。そうだ明日のランチは、城山社長とご一緒する約束なんです。あなたの正社員の件、お願いしてみましようか」

健「社長に直接ですか」

博「オーナー企業ですから、話は早いと思いますよ」

健「急に調子よく）それは助かります。契約社員は待遇も悪いし、雇用も不安定ですから」

博「分かりました。明日城山社長にお願いしてみましよう」

健「(愛想よく) よろしくお願いします。(佳子に) おい、何をしているんだ。早くお茶をお出しなさい」

佳子「はい(キッチンに行く)」

薫「どうぞお構いなく」

博「それにしても、世の中狭いですな」

健「そうですね。うちの会社が、お宅のお得意だなんて、本当に奇遇ですね」

博「その上、社長の城山さんとは何でも話せる友だちなんです」

薫「これも何かの縁ですね」

健「ありがたいご縁です」

博「あなたの正社員化の件は、お任せください」

健「よろしく願います」

薫「あなた頑張ってるね」

博「たぶん大丈夫だと思いますよ」

健「(席を移りながら) ありがとうございます。うちの大地が和彦君とお友達でよかったですよ」

佳子お茶とクッキーを持ってくる。

佳子「どうぞ、お口に合うか分かりませんが」

佳子お茶とクッキーを配る。

健「(クッキーを食べながら博に勧める) どうぞ」

博「普段私辛党なんです」

博クッキーを食べる。

健「奥さんもどうですか」

薫「結構です！糖断ちしていますので」

健「トウダチ・・・？」

薫「ええ、健康の為に甘いものは食べないようにしているんです」

健「ああ・・・トウダチね」

気まずい間。

佳子「(思い詰めた様に) やっぱり、やっぱりイジメが原因なのでは・・・」

薫「学校もイジメの事実はなかったと言っていますし」

佳子「でも・・・」

薫「よくある子供のケンカですよ。仲良しなんだし」

博「(話を遮るように) これは手作りですね。朝から何も食べていないんです」

クッキーを食らたべる。

博「うん、うん、これはうまいですね。もう一つ」

健「(頷きながらクッキーを食べ) こいつの作るクッキーは、絶品なんです」

博「(薫を肘で突き、声を押さえて) 和彦のためだ」

薫渋々クッキーを食べる。

薫「え！美味しい！」

佳子が席に着く。

佳子「大地には、なるべく手作りのものを食べさせています」

薫「何か秘訣はあるのですか」

佳子「秘訣と言うほどのものではないのですが、隠し味にアーモンドの粉を入れるんです」

薫「アーモンドの粉ですか」

佳子「ええ、アーモンドの粉を入れるとコクが出ます。大地の大好物です」

薫「分かりました。今度和彦のために作ってみますわ」

薫のスマホが鳴る。

薫、相手を確認して、一瞬ためらう。

薫「すいません。今示談交渉の最中なんです。失礼します」

薫が皆に背を向け部屋の隅（上手）に行き、スマホにでる。

薫（声を潜めて）何なの。今忙しいのよ。それで……（急に厳しい口調で）何なの！どういうことなの！事故なんだから、相互責任でしょ。休業補償なんてとんでもない。非情でも何でもないわ。これは常識よ！もう切るわよ」

薫スマホを切る。

薫「申し訳ありませんでした。電源を切っておきます」

薫スマホの電源を切る。

健「相互責任ですか……」

薫「事故ですから」

佳子「大地が飛び降りたのは、『事件』です」

博「事件なんて、大袈裟な」

佳子「うちの子は入院しているんですよ」

健「検査入院ですけどね」

薫「補償は十分考えております」

健「血は繋がってなくても大切な一人息子なんです。将来もありますし」

博「和彦の将来もありますし、今回は穏便に話し合いたいのですが」

佳子「話し合いたいのって、何を話し合いたいのですか」

博「子供同士のケンカですから、ことが大ごとになる前に、親同士が話し合いの場を持って、事実を確認しておきたいんです」

佳子「イジメが原因ではなかったと確認したいのですか」

博「子供のケンカですから」

薫「まだ十歳だから、『触法少年』で、刑法41条により、刑罰は受けないんですよ。でも状況によっては、施設に入ることもあるんですよ」

健「事情は、分かりますよ」

佳子「大地は、頭を強く打ったそうです。何事もなく、無事に帰って来れば、私はそれでいいんです。大事がなければ…」

電話のベルが鳴る。

ビクツとする一同。

スマホを捜す博。

不安な表情を見せる佳子。

健が電話に出る。

健「もしもし、ああ茂か。今来客中なんだ。え、急用？何だ、こないだの自動車事故の件か。いい弁護士ね。お、おいおい、ちようどこに優秀な弁護士さんがいるから聞いてみるよ」

健が薫に話し掛ける。

健「奥さん、すいません。弟が自動車事故に遭って、示談の交渉中なんです。相手は女性弁護士で、かなり強引らしいんです。いい弁護士さんを紹介して頂けませんか」

薫「加害者なのに強引なんですか」

健「そうなんです。相互責任、相互責任と強引に息巻いて、補償交渉になかなか応じないそうなんです」

薫「相互責任？」

博「相互責任・・・」

健「相互責任？（電話に向かって）相手の弁護士の名前は分かるか？ええと、最上・・・薫・・・」

健、ゆっくり薫を見る。

博「（薫を指さしながら）薫」

健「どうも奥さんと係争中なのは、弟のようです。何とか補償を受けられるように配慮して頂けませんか」

博「薫。少しぐらい手心を加えてもいいんじゃないか」

薫「（きっぱりと）仕事とプライベートは別です！」

博「そんな固いこと言うなよ。まあ時期が時期だし」

薫「今まで依頼人の期待に込えてきたから、今の私があるのよ！」

博「（嫌味っぽく）弁護士の鏡だな、お前は」

薫「相互責任は、相互責任。断固ゆずる気持ちはありません！」
健「分かりました。(電話に)茂、すまん。役に立たないどころか、
火に油を注いだみたいだ。ごめんね。大変だろうけど、一人で、
お前一人で頑張れよ」

健が電話を切り、席に戻る。

博「お役に立たなくて申し訳ありません」

健「仕方ありません」

薫「あなた、そろそろお暇しましょう」

博「そうだな。では、大地君のお見舞いはまた日を改めてお伺い
するということで、本日はお忙しい中お手間を取らせました」

薫「失礼します」

薫と博が立ち上がり、帰りかける。

佳子は、二人の前を歩いて玄関へ。

健「強く、はっきりと」そうだ、肝心なことを聞いていない！」

博「肝心なこと？」

健「息子さんはどう思っているのかな」

薫「和彦が？」

健「大地に大怪我させたことを、息子さんはどう思っているのか、
まだ聞いてない」

博「大怪我かどうか、検査の結果を見てみないと」

薫「和彦は十分反省しております」

佳子「反省？やっぱり、イジメていたから」

博「いえ、原因は、イジメではありません」

薫「きつと、大地君が飛び下りるのを、止められなかったことを
反省しているんです」

健「きつと？あなたたちは、きちんと息子と向き合っているのか
！」

薫「(気色ばんで)向き合っています！普段は忙しくしていますが
、休みの時は息子と十分な時間を持っています。子育てには自
信を持っています」

健「お宅の息子さんは、本当は問題児じゃないのか」

博「問題児！」

薫「(憤然と)言いにくいですけど、お宅の息子さんにも問題があ
ったのでは」

佳子「うちは被害者ですよ！大地に問題があったなんて、大変な

「言いがかりです」

薫「被害者にだって問題はあんでしょ」

博「(薫の話を遮って) まあ、まあ、大地君の怪我が治ったら、仲直りの場を作りましょう」

佳子「仲直り？」

博「そうです。せっかくの城山社長とのご縁のあることですし」

健「男同士の話し合いですか」

博「そうです。男は絶えず前進あるのみです」

健「(立ち上がって) 試験の海を乗り越えて」

博「(芝居がかって) 新たな友情が生まれる」

健「(大げさに) 男のロマンですな」

佳子「大地はまだ入院しているのに・・・(沈痛な母の心情)」

博「それでは、日程はまた後日ご相談ということぞ」

薫「貴重なお時間をありがとうございました」

博「雨降って地固まる、ですな。行こう」

健「まだ、雨降っていますよ」

薫「え！」

健「まだ、雨降っています」

博「・・・」

健「まだ、雨が降っていますよ、外は」

薫「ああ、」

健「これをお使い下さい」

健が、博に挑戦的にビニール傘を渡す。

博は突きつけられた傘を受け取る。

博「ありがとうございます」

薫「失礼しました」

二人帰る。

佳子ドアを閉めて、片付けるためにソファに行く。

健「(戻りながら) 入院費用や、補償の問題も話が早そうじゃないか」

佳子「そんなことよりも、大地は大丈夫かしら。今から病院へ行きませす」

健「大丈夫だよ。そんな心配するな。何かあれば、病院から連絡があるよ」

突然の電話のベル。

佳子「え！大地に何かあったのかしら」
佳子慌てて、電話に出る。

佳子「もしもし。もしもし」
電話は繋がっていない。
受話器を置き、音源を探し回る。
最上夫婦が座っていたソファの陰に、鳴っているスマホを見
つけ、戸惑っている健。
玄関に戻ってくる博と薫。

薫「すみません。主人が携帯を忘れてしまって」
博が健の手の中で鳴っているスマホを見て慌てて部屋入って
くる。

博「ちよつと、失礼します」
博が鳴っているスマホを健から奪うように取り上げて、相手
を確認する。

博「今大事な、大事な交渉の途中なんです」
スマホにでる。

博「うん、うん。（最初は冷静に相手の話を聞いているが次第に感
情的になる）何！何が和解だ！和解の条件なんて無視しろ。こ
ちらが断然有利なんだぞ」
健と佳子は、博の剣幕に困惑している。

薫「あなた！こんな時に失礼よ！」
博無視してスマホを続けている。

博「投資は喰うか、喰われるか、生きるか、死ぬかなんだ。情け
は無用だ！」
薫も部屋に上がり、博のスマホを取り上げる。

博「何をする！大事な話の途中なんだ」
博が薫からスマホを奪い返す。

薫「もう、止めて！」

薫が博のスマホを取り上げようとして、二人揉み合いになる。

健が止めに入る。

健「ケンカするなら外でやってくれ！」

博はスマホを奪い返し、健の近くまで行き、話しかける。

博「すみません。この連絡は、お宅の城山社長の投資物件なんです」

健「ええ！うちの社長ですか」

博「ええ、企業買収が上手くいきそうで、今が正念場なんです」

健「会社にとって良いことですか」

博「もちろんです。うまく行けば、日経にも出る大型買収で、ボーナスも期待できますよ」

健「ボ、ボーナスですか」

薫は二人のやり取りを見ながら、佳子に近づく。

博「ええ、それよりも明日の社長とのランチで、この話ができれば、あなたの正社員化の話も切り出しやすくなります」

健「分かりました。頑張ってください」

博「任せてください」

健「社長の投資じゃ仕方ないな」

博が頷いてスマホをかけ、部屋の隅に行って小さな声で話し始める。

薫「(佳子に)すみません。お見苦しい所をお見せしてしまって」
佳子「・・・」

博がスマホを掛けながら、健に手招きして、OKサインをしきりに送っている。
嬉しそうに頷いている健。

薫「(佳子に)本当に申し訳ありません。息子さんのことでお伺いしているながら、仕事の話になってしまっ」

佳子「・・・」

薫「(溜息をつきながら)私も子供のことが心配で、心配で…(母の心情)」

佳子「コーヒーでも如何ですか」

薫「頂きます」

佳子「どうぞ」

薫が席につく。

佳子は、お茶を片付け始める。

博「スマホを切つて」企業買収は上手くいきますよ」

健「え！まじっすか」

博「これでああなたの正社員は決まりですね」

健「あ、ありがとうございます。一杯いかがですか？良い酒があるんです」

佳子「あなた」

博「いいお酒？」

健「百年の孤独ですよ」

健、棚に置かれたボトルを持って来る。

博「ほお！百年の孤独ですか。プレミア焼酎ですな。ロックで一杯頂きます」

薫「・・・」

博「前祝といきますか」

佳子「前祝い？」

健「よろしくお願ひします」

健がグラスを取りに行く。

薫「(佳子に) すいません。こんな時に」

佳子「いえ、主人がお誘ひしたのですから・・・」

佳子お茶を片付けている。

気まずい雰囲気。

佳子がお茶のセットを持ってキッチンへ行く。

健がグラス三つと氷を持って来る。

健「お待たせしました」

健がお酒をグラスに注ぐ。

健「どうぞ」

博「いい酒だ。中々手に入らない酒ですよ。うまい！」

博一気にグラスを飲み干す。

健「いい飲みっぷりですね」
健がお酒を注ぐ。

博「仕事が入りまくっている時の酒は格別ですな」
健「佳子、何かつまみを作ってくれないか」

佳子「はい」

健「奥さんもいかがですか」
酒を注いだグラスを渡そうとする。

薫「私、お酒は飲みませんの」

博「こいつは、酒の本当の美味さを知らないんだ。俺が飲んでやるよ(グラスを受け取る)」

薫立ち上がり、博からグラスを奪うと、立ったまま、一気にグラスを煽る。
驚く三人。

薫「ふん、何が本当の美味さよ!」

薫がグラスを持つ手をグツと、前に突き出す。
何故か怯む博。

薫「もう一杯下さいな」

健「これは嬉しいですな。奥さんもいける口なんだ」

健が薫のグラスにお酒を注ぐと、薫また一気に煽り、そのグラスを優勝トロフィーのように高々と掲げる。

健「すごい!お強いですね(拍手する)」

博「(拍手しながら) お前すごいな!」

薫「目が少し据わっている」ふん、お酒なんて、飲もうと思えばいくらでも飲めるわよ。おかわり」

博「お前そんなに飲んで大丈夫か」

健が薫のグラスに酒を注ぐ。
飲む薫。

健「(ボトルを眺めながら) 正直一人ではこの酒なかなか飲めなかつたんです」

博「(調子よく) 美味しい酒があると、気が和みますな」

健「あの、乾杯してもらっていいですか」

博「(偉そうに) 良いですよ。あなたの正社員を祝して乾杯！」

健「ありがとうございます」

健が美味そうに酒を飲む。

健「ハッツ美味い！」

博「勝利の美酒ですな」

健「正直言いますと、若い社員にアゴで使われるのは、しんどいです」

博「今どきの若いもんは、何考えているか分かりませんな」

健「連絡事項もグループラインでやってるようで、私には伝わらないんです」

博「最近、小学生でも『ライン』で連絡とっているようですよ」

健「小学生でもスマホで『ライン』ですか」

博「今の子供たちは、学校が終われば塾、遊びいえばゲーム。前を向いて横一列に並んでいるような関係で、人間関係が希薄ですよ。同じグループでも、本当は仲良しじゃないのかも」

健「なんか隙間がなくて可哀想ですね・・・」

博「そうですね・・・」

薫「一人で酒を飲みながら独り言」フン、何が可哀想よ。隙間だらけの私の方がよっぽど可哀そうよ(一口酒を飲む)」

薫が手酌で酒を飲んでいる。

健「大人より子供の方がずっと孤独かも・・・」

薫がボトルを手に取り見ている。

博「ええ、仲間と一緒にでも寂しいでしょうね・・・」

薫「(酒を見ながら) 百年の孤独か・・・」

健「昔は、ガキ大将とかいて、ケンカの仲裁をしたり、仲間外れなんか許さなかったですよ」

博「そう、近所に必ず上級生がいて、縦の関係があつて、小さい子の面倒も良く見ていましたね」

健「俺も大阪の地元じゃちよっと知られたガキ大将でね。仲間外れにするような奴は、ボコボコに殴って、仲直りさせたもんです」

博「お宅も大阪ですか。私も大阪なんですわ」

健「へえ、それは奇遇でんな（大阪弁になる）」

薫「酔って独り言）ホンマ奇遇やね。べたな大阪人が二人もいて」

健「で、大阪のどこいらへんですか？」

博「（大阪弁で）大阪の東成ですわ。ガラの悪い下町でんねん」

健「東成？これまた奇遇でんな。自分も東成の城西小学校出身ですわ」

博「え？城西小学校？」

博・健「城西小学校」

博・健・薫「城・西・小学校」

博「え！まさか（健をじっと見て）、たけちゃん違うか？」

健「違うも何も真正銘のたけちゃんや。わしも、さっきから気になってたんや。あんたへたれのヒロかいな」

博「そうや、ヒロや。小学校3年の時に転校したから分からへんかったけど、やっぱりたけちゃんやったんか。懐かしいな」

薫「（茶化して）よ！感動のぶっ対面〜！」

健「ほんま、懐かしいな。あのビービーよう泣かされとったヒロかいな」

博「昔のことや、言わんといて。でもたけちゃんには、よう助けてもろたな。今でもたけちゃんには頭上がれへんわ」

健「仲間助けるのは、当たり前や。あの頃は、戦争やゆうて」

博「タマとったんで！」

健「ほかの小学校によく喧嘩行つてたな」

博「たけちゃん、強かったもんな」

健「東京へ転校してから、元気にしとったんか」

博「大変やった。大阪弁やゆうて、馬鹿にされて、ようイジメられたわ。たけちゃんが、おれへんかったから、えらい目におうてしもた」

博「苦勞したんやな」

博「体力やったらかなえへんから、勉強頑張ったんや。塾へも行ったし、家庭教師にもついた。それで第一志望の大学にも入れた」

健「どこや？」

博「某国立大学や」

健「嫌味な言い方やな。東大やろ」

博「そうや。大学を卒業して、外資系の銀行に入行して、同級生の女房と結婚したんや」

薫「かなり酔っている」私のことを言ってるの」

佳子が酒の肴を持って来る。

博「こいつは俺よりも優秀やから弁護士になって、和彦が生まれ
て、35歳の時に起業して今の会社を作ったんや」

健「それで今や社長様かいな。偉いな。(佳子に) 佳子、こいつ俺
の幼馴染なんや」

佳子「(酒の肴を用意しながら) ええ、まだお若いのに、すごいで
すね。どうぞ」

博「社長ゆうても、吹けば飛ぶよな小さい会社やで」

健「立派なもんや。俺なんかしがないトラックの運転手や」

博「まあ、苦勞もしたけど、仕事は順調で、夢中になって働いた
わ。平気で人も泣かしたし、ホンマ弱肉強食の世界を生きとつ
たわ。せやからやとと金にも不自由せんようになったし、金が
あれば幸せも買えると思とつたんや」

健「うらやましいで。うちなんか女房と二人で必死に働いても生
活は楽にならへん」

博「健ちゃん、何が幸せか分かれへんで。金で買えんもんもある
」
健「そうやな、三年前に再婚同士で、こいつと結婚して、(佳子に
) 今は幸せな家庭やしな」

佳子「ええ。健さんは、とても優しいし、子供も大切にしてくれ
るから、幸せです」

健「共働きで苦勞かけているけどな」

佳子「いえ、苦勞だなんて・・・」

健「前の亭主は超一流企業のエリートサラリーマンやったんや」

佳子「ええ、経済的には問題なかったんですけど・・・」

博「何があったんや」

健「暴力亭主やったんやな」

博「へえ！」

佳子「気に食わないことがあると、突然暴力を振るうんです。毎
日怖くて」

博「DVでんな」

佳子「ええ、自分に向かっていている時はまだ我慢できたのですが、

子供にまで手を上げるようになって・・・」

健「子供に暴力振るう奴なんか最低や！」

佳子「大地を守るため、逃げるように家を出て、それでも追いか

け回され、一時は警察沙汰になったんです」

博「苦労しはったんやな」

佳子「弁護士を立てて、やっと離婚できました」

博「弁護士？またそれは大事になりましたな」

佳子「ええ、でもその弁護士さんが良い人で、親身になって相談に乗って下さったんです。本当に助かりました」

博「(薫に) お前と大違いやな」

薫「(かなり酔っている) 弁護士の値打ちは、金で決まるのよ！」

健「ズバツと直球勝負でんな」

博「そこまで言い切ると、むしろすがすがしいわ」

薫「(目が座っている)・・・バカにして」

佳子「でも友達で紹介で健さんと出会えてよかったです」

健「わしこそ佳子と出会えてラツキーやった。小さい頃から、家庭に恵まれへんかったから、幸せな家庭を持つのがわしの夢やったんや。大地も血は繋がってへんけど、本当の息子やと思ってる」

佳子「本当によく面倒をみてくれます」

博「健ちゃん偉いな」

健「最初は、なかなか懐いてくれへんかったから困ったけどな」

佳子「大地は、男の人が怖かったんです。前の亭主が暴力を振るったから」

健「わしは、大地の父親になるために一生懸命やった。早く『お父ちゃん』と呼んでもらいたかったんや。本当の家族になりたかったんや」

佳子「健さん・・・」

健「でもな、なかなかお父ちゃんと呼んでくれへんかった。その時思ったんや。しょうもない父親よりも、情(じょう)の通ったおじさんでええやないか。そう思ったら目の前がパーツと開けたわ。本気で怒り、本気で笑うガキ大将でいようと思ったんや」

薫「よ！ガキ大将」

博「ええな。俺は、しょうもない父親やで。なんぼ金があっても、うちなんか別居中やで。この歳になってからの一人暮らしは、寂しいで・・・」

健「ヒロ、なんで別居したんや」

博「家の中に、男は二人いらん」

ゴン！薫ポトルをテーブルに置く。

健「そうやな」

博「女房が強すぎると、息苦しいんや。せやから、俺もあんまり家に帰らへんようになってしもうた……」

健「……」

博「今考えると、もっと家庭大事にせなあかんかった。やつぱり仕事に逃げてたんや……俺も悪かったんや（泣く）」

健「やつぱり、昔のビービーよう泣かされとったヒロやな」

博が健のタオルを取って、涙を拭く。

薫「泣くな！」

博「（涙を拭きながら）ちよつと酔ったみたいや……」

健「大人になっても変わってへんな」

博「健ちゃん、情けないで。今、弁護士の子と離婚調停中や」

健「（薫をみながら）手強い相手やな」

博「子供の親権も財産もぼったくりやで。その上、慰謝料と養育費や。考えただけで、頭痛とうなる」

健「そら大変やな」

博「今息子のために、一時休戦中やけどな。結局は、家庭生活も子育ても上手くいかんかった……」

健「まだ、わしらこれからやで」

博が佳子に向かって、

博「奥さんも一杯どうですか」

佳子「私は、飲む気になれなくて……」

博「どうやろ。子供の仲直りの席に親も同席するちゅうのは。親同士が仲よう飲んでいると、子供たちも仲直りしやすいで」

健「そやなあ、子供のケンカに親が参加するちゅうのも、たまにはええやろ」

博「（グラスの酒を空けて）ほんなら、日時はまた連絡しますわ。そうや、奥さん、今から四人で行きましょう。私新橋にええ店知ってますねん。」

佳子「（きつぱり）私は、行きません」

博「一杯ぐらい付きようてくださいよ」

佳子「（強く）行ける訳ないじゃないですか！今から病院に行くんです」

博「そんな固いこと言わんと、一杯だけでも付き合ってください

な。ほんま魚の美味しい店なんですわ。今から店に連絡しますわ」

博がスマホを掛けようとする。

健「(博の腕をつかみ) ヒロ、今日は止めとけ」

博「ヒロ、ヒロ、俺のこと呼び捨てにすんな!」

健を突き離す。

健「・・・!」

博「健ちゃんが俺に偉そうなと言える立場か!」

健「何!(気色ばむ)」

博「お前、城山運輸の正社員になりとうないのか」

健「何やて!」

博「俺はこの時を待ったんや。小さい時から、イジメられて、いつか見返してやるとずっと思ってたんや」

健「俺は、お前を庇ってたんやないか」

博「何言うとんねん。周りにいる奴はみんな一緒や。俺は小さい時から人の顔色ばかり見てきたんや。せやから、息子には、人の上に立てと教えてきたんや」

健「お前そんなこと思ってたんか」

博「俺は、この時のために、必死に頑張ったんや。それで東大行って、今や社長やぞ」

健「わしは、お前に媚び売ってまで、正社員になりとうないわ」

博「やっぱり健ちゃんは、ええかつこしいやな。そんなに意気がって、何の得があるんや」

健「意気がって、強がって、生きて来たんや。友だちの為に喧嘩して、そいつに裏切られて高校だって中退した。そんなしようなない人生やけど、俺は自分の心を売ってへん。ヒロ、さっさと帰れ!」

博「クッ、クッ、クッ(笑っているよう)」

健「フン、笑いたかったら、笑え!」

博、実は泣いている。

健「お前・・・?」

博「健ちゃんごめんな。やっぱり酔うてしもた。つい本音が出てしもたんや」

健「あれがお前の本音か」

博「そうや、わしは、アリみたいに小さい男やねん。堪忍してや。

クッククック（泣く）」

健「まあええ、今日のところは、もう帰れ」

博「いや、わしもこのままでは帰られへん。今日はわし一人でも銀座で飲むわ」

健「お前懲りん奴やな」

博「そうや、銀座の明美を呼び出したろ」

健「何や、明美って」

博「銀座のクラブ・ルルのママや。ええ女やで。健ちゃんが逆立ちしても手でへんで」

健「俺は、銀座で飲んだこともあれへん」

博「そうや、健ちゃん連れてったるか。ルルは高級クラブやで」

健「（少し心が動く）高いんやろな」

博「銀座で金のことを気にして飲む奴は、田舎もんや。時間早いから、明美を呼び出して、寿司でも食おうか。そやな、久しぶりに久兵衛に行くか」

健「きゅ、久兵衛言うたらあの久兵衛かいな」

博「そや、あの久兵衛や。コハダの新小（しんこ）なんか最高や。

あの繊細さは、大阪もんには分かれへんで」

健「お前も大阪もんやないか」

博「せやから、苦労したがな。金も掛かったしな。健ちゃん、銀座やったら、意外と健ちゃんみたいなのワイルド系がモてるんやで」

健「ほ、ほんまか」

博「健ちゃん、いくらモテても銀座の女に本気になったあかんで。

ほな健ちゃん、いこか」

健「お、俺には、佳子がいるし・・・いや、今から病院やし、止めとくわ」

博「そうか、しゃないな。ほな、わし一人で行くわ」

健「ヒロ、お前奥さんは大丈夫なのか？」

博「大丈夫も何も、こいつとは離婚するんや。怖いもんなんかあれへん。明美の白い肌思い出したらゾクゾクして来たわ」

薫がすつと立ち上がる。

博「ひゃー！」

博、反射的に席を立ち、ソファに後ろに逃げる。

博「ごめん！ごめん！明美とは何にもあれへん。すごく清い関係なんや。そうや仕事関係なんや。手つないだけや。お友達なんや。誓って浮気なんかしてへん。信じてくれ！」

健「(呆れて) お前、あやまるのん上手やな」

博「ほっとけ」

薫が歩き出す。

博「(頭を抱えて) わっ！出来心やったんや。一回だけや。ほんま一回だけなんや。神さんに誓うてもええ。わっ！ごめん！堪忍してや！」

薫が博を通り過ぎる。

博「・・・お、お前どこ行くんや」

薫「トイレ・・・」

健「トイレは、そつちじゃなく、こつちですよ」

薫「気分が悪い。吐きそう(座り込む)」

博「(慌てて) 大きく深呼吸しろ」

佳子「お水を取ってきます」

慌てて健はバスルームから派手な洗面器を持って来る。佳子はキッチンからお水を持って来る。博は薫のせなかを摩っている。佳子が薫に水を飲ませる。

佳子「大丈夫ですか？」

薫「すみません」

博のスマホが鳴る。博相手先を確認して怪訝そうにスマホにでる。

博「はい、最上です。いつもお世話になっております。え！本当ですか」

薫フラフラと立ち上がる。

博「分かりました。今女房も一緒なので直ぐ参ります。はい」
薫が博のスマホを取り上げる。

博「止めろ！重要な連絡なんだ」

薫「フン、何が重要よ！」

薫がスマホ投げ捨てる。博慌ててスマホを拾い上げ、掛けよ

うとするが反応しない。
博が薫に詰め寄る。

博「(壊れたスマホを見せて)こんなになってしまったじゃないか！」

薫「もう、スマホなんかうんざり！」

薫「しゃがみ込む。佳子も座る。」

博が屈んでいる薫を見て。

博「(薫に)和彦が学校に行っていないぞ」

健・佳子「え！」

博「和彦が、息子が学校に行っていないんです。今、私の携帯に、学校から連絡がありました」

佳子「何処か心当たりはないのですか」

博「いや、私には・・ありません。とにかく、今から学校に行きます」

健「分った。手伝いできることがあれば、何でも言うてな」

博「ありがとうございます。おい、薫行くぞ」

薫「何処へいくのよ」

博「こんな時に酔っぱらうな！学校だ」

薫「何しに行くのよ」

博「和彦を捜しに行くんだよ」

薫「和彦なら家にいるわ」

博「え！・・・どうして？」

佳子・健「・・・！」

薫「学校に行きたくないって言うから。あの子も傷ついているのよ。(佳子に)奥さん、あの子も苦しんでいるんです。分つて下さい」

薫、手をついて頭を下げる。

佳子「分かれと言われても、困ります。(立ち上がって)うちの子は入院しているんですよ」

薫「これ以上騒ぎが大きくなると、和彦はどうなるか・・・それが心配で、心配で、どうぞ助けてください。この通りです」

薫が頭を床に擦らんばかりに下げている。

佳子「わたしは、母親として、当時の様子を知りたいんです。息

子のことを分かってやるためにも、事実が知りたいんです」

薫「・・・」

博が薫に詰め寄る。

博「なぜ和彦が学校に行っていないことを、俺に言わなかったんだ！」

薫「あなたに言っつて、どうなるのよ」

博「俺は、俺は、父親だぞ」

薫「父親？（立ち上がって）何が父親よ。父親らしいこと何もしないくせに、いまさら父親づらししないでよ！」

博「何！」

博、薫を平手打ちする。

佳子が薫を庇うように抱きかかえる。

佳子「止めて！」

健は、更に殴ろうとする博を押さえつける。

健「止めろ！ヒロ。うちで夫婦喧嘩すな！」

博「すまん、健ちゃん。ついカッとなってしもうた（薫を殴った手をさすりながら、落ち着きを取り戻す）」

薫「暴力に訴えるなんて、最低の男ね」

博「お前は母親らしいことをやってきたのか」

薫「あなたよりましよ」

博「おれは自分ができることを」

薫が立ち上がって博と向き合う。

薫「お金を与えるのが、父親の愛情だというのが、お金で愛情が買えるの！」

博「・・・」

薫が威圧的に、博に詰め寄る。博は薫の勢いに押されている。

薫「和彦が苦しんでいることも知らないくせに、偉そうなこと言わないでよ！」

薫さらに博に詰め寄る。

薫「ウツ（何かしゃべりたそう）」

博「何だ！（薫の勢いに怯む）」

薫「ウッ！」

博「いい、言いたいことがあれば、はっきり言えよ！（動揺している）」

薫「（小さく）吐きそう」

博「え？（聞き返す）」

薫「（強く）吐きそう！ー！」

博「ワッ！」

博、大混乱。

健が薫の前に洗面器を出す。佳子タオルを持って来る。

薫吐く。健が洗面器で何とか受け止める。

博「ご、ご迷惑かけて、申し訳ありません。洗面所をお借りできませんか」

健「こっちやで」

薫「（酔いがぶりかえして）すいません、すいません」

健「（薫に）これ自分で持って下さい」

薫「・・・すいません」

健が二人を洗面所へ案内して行く。

佳子一人ぼつんと居間に残る。カーデガンを脱ぎ、ソファに座りこむ。

佳子「みんな、勝手なことばかり・・・」

突然の稲妻！落雷の音！停電。

暗闇。キッチンの方からは、混乱した三人の大声が聞こえる。

周りの音が消え、暗闇の中十字架が光始める。

大地のテーマ曲が流れる。

スポットライトに浮かび上がる大地。

佳子が、大地（微笑んでいる）に気づく。

佳子「大地！どうしたの？病院じゃないの」

大地「・・・」

佳子「危ないじゃないの！こんな大雨で、雷も落ちているのに」

大地「・・・」

佳子が大地に近づき、スポットライトの中に入る。

佳子「おかあさんは今から病院に行こうと思っていたのよ。検査はどうだったの。頭は大丈夫。(頭を摩っている)」

大地「大丈夫だよ(母を見ない)」

佳子「そう、よかった。後で、病院に行つて詳しく聞いてくるわ。本当に良かった」

佳子、大地を強く抱きしめる。

大地「おかあちゃん、痛いよ」

佳子「ごめん、ごめん。かあさん嬉しくて。お前にもしものことがあつたら、かあさん生きていけない。本当に良かった」
スポットライトの中、大地を慈しむように摩ったり、囁いている佳子。

明るくなる室内。

洗面所から三人の話し声が聞こえてくる。

健「停電なんて、久しぶりですね」

薫「ご迷惑をお掛けして申し訳ありません」

健「大丈夫ですか」

三人戻つて来て、ソファに座る。

薫「ええ、まだ少し体がフラフラしています」

博「飲めないんだつたら、初めから飲むなよ」

薫「あなたが酒の味も分からないなんて言うから、無理して飲んだのよ」

博「フン、自分の醜態を人のせいにするな！お前はいつだって」

健「まあ、まあ、たまにはイイじゃないですか」

薫「すいません。ご迷惑をおかけしました」

薫が深々と頭を下げる。

健「それよりも、和彦君は大丈夫ですか」

薫「学校でも色々あったみたいで。学校に行きたがらないんです」

健「そうですか」

博「お見苦しいところを見せてしまつて、申し訳ありませんでした。和彦が家で待っているのです、そろそろお暇いたします。(薫

に) 帰るぞ」

薫「(佳子に) それでは失礼いたします」

佳子に反応はない。大地を愛おしげに見つめている。

健「佳子、佳子、お帰りになるよ」

佳子ふっと我に返り。

佳子「立ち上がる) わざわざお出で頂き、ありがとうございまして。このように、大地が帰ってきたので、少しホッとしております」

博、薫「・・・？」

健「・・・大地はどこにいるんだ」

佳子「ここにいるじゃない、ねえ大地」

三人は、部屋の隅に集まり、相談し始める。

佳子は、大地を愛おしげに、見つめている。

薫「奥さん、大丈夫なの。私には大地君は見えないわ」

博「俺にも見えない。奥さんは、大地君と話しているのかな」

健「ショックが大きすぎたんです」

博・薫「・・・！」

健「佳子は、事件のショックから立ち直っていません。現実には見えないものが見えているのです」

薫「そんな・・・！」

健「佳子には、大地が見えてるんです」

博「・・・(佳子を見る)」

健「すいませんが、しばらく佳子に合わせて頂けませんか。話しているうちに、現実に戻ると思っています」

博「分かりました」

薫が佳子に近づく。

薫「大地君は、大丈夫なの・か・な」

佳子「少し元気がないけど、大丈夫ですよ。詳しい検査結果は、今から病院に行きます」

健「ともかく、大地が戻って来てよかった・・・」

佳子「(大地に向かって) 大地、どうして教室の窓から飛び降りたの？」

大地「ぼくが弱かったんだ・・・」

佳子「弱かった、どういうことなの」

大地「仲間外れになるのが怖かった・・・」

佳子「仲間外れ・・・」

大地「学校に行くのが苦しくて、苦しくて」

佳子「そんなに学校が苦しかったら、学校なんか行かなくていいのよ」

大地「・・・」

佳子「どうして、お母さんに話してくれなかったの」

大地「お母さんに心配かけたくなかった・・・」

佳子「学校で、イジメられてたの」

大地黙って下を向く。

薫「イジメ!!」

佳子にしか大地は見えないし、大地の声は聞こえない。

大地「一番苦しかったのは、『空気ぐっこ』だった・・・」

佳子「『空気ぐっこ』・・・」

大地「皆に話しかけても空気みたいは無視するんだ」

佳子「皆が大地を無視するの・・・」

大地「話しかけられもしない」

佳子「そんな！酷いイジメ」

薫「イジメなんかないわよ！」

大地「・・・それでも、一人ぼっちになりたくなかった」

佳子「先生に言ったの」

大地「・・・言った」

佳子「先生は注意してくれたの」

大地「そんなの僕の気持ちの問題だって・・・」

佳子「気持ちの問題・・・」

大地「もつと僕が強かったら・・・」

佳子「そんな学校なんか辞めてもいいのよ」

大地「本当は、本当は、学校にいても、ずっと家に帰りたかったんだ！」

佳子「帰ってくればよかったじゃない。どうして飛び降りたのよ」

大地「僕は、人間って簡単に死ねるって言ったんだ。そうしたら、

和彦君たちに死ね、死ねって言われて」

佳子「え！和彦君たちに死ねって言われたの」

薫「和彦は死ねなんて言っていないわ」

大地「：先生にも、人間は簡単に死ねないわよって否定されて」

佳子「先生にまで…」

大地「放課後、強がって教室の窓に乗ったら、皆に飛べ、飛べって囃し立てられ、飛ぶしかなかったんだ」

佳子「皆に飛べって言われて…どうして、どうしてそんな危ないことしたのよ」

薫「和彦は、飛べなんて言っていないわ」

大地「：怖かった。足が震えて、怖くて下を見られなかった」

佳子「大地…」

大地「皆に飛べ、飛べって言われていると、飛び降りた方が、楽になれる気がしたんだ」

佳子「そんな、飛び降りた方が楽だなんて…」

大地「それに、それに、思い切り飛べば…家に帰れる気がしたんだ」

佳子「窓から飛び降りて、家に帰れるわけないじゃない！（悲鳴のように）」

佳子、大地を抱きしめる。

薫が佳子に近づき、片手で佳子の肩を掴む。

薫「アンタ、誰と話をしてるのよ（佳子を小突く）」

博「薫、止めろよ！」

健「止めてくれ！頼むから止めてくれ！」

博と健が薫を必死に止めようとする。

二人を無視して。

薫「私たちには、何も見えないわ」

佳子「え！（閃光が走る）ここに大地いるじゃない」

佳子、両手で大地の肩をしっかりと掴む。

遠くで雷鳴が聞こえる。

薫「そんな見え透いた演技しないでよ！（大地を無視して佳子を突き飛ばす）あんたにイジメ、イジメって騒がれて、和彦の将来はどうなるのよ」

佳子「大地が、大地本人が言っているのよ」

薫「それが見え透いた演技なのよ！」

佳子「演技……」

薫「あなたが現実を直視しないで、騒ぎ立てるから問題がどんどん大きくなるのよ！それでどれだけ迷惑してると思っているの！」

博「薫、もう止める！」

健「薫さん、止めて下さい！」

薫「二人に制止され、ますます興奮してきて）イジメ、イジメつて騒ぎ立てたら、和彦はまだ十歳なのに施設に入らなきゃいけなくなるのよ！悪質と判断されたら、家裁の審判を受けるのよ！」

佳子「薫さん、こうして大地が元気に戻って来たから、いいじゃありませんか」

佳子が薫を押し退け大地のところへ。

薫「なに寝ぼけたことを言ってるのよ！事態はもっと深刻なのよ！いったい何処に大地君がいるのよ！」

佳子「ここにいるじゃない！ねえ大地（優しく）」

大地「……！」

遠くの雷鳴が近づいてくる。

佳子、大地を抱きしめ、健を見る。

健は、佳子から目をそらし、首を横に振っている。

健「……」

博「……奥さん……確かに俺たちには、大地君は見えない」

佳子「そんな……あなた、はっきり大地が戻って来たと言って！」

佳子、大地を連れて健の前に行く。

健、辛そうに下を向く。

健「……」

佳子、大地の肩を強く掴んで。

佳子「ここに、ここに大地はいるじゃない！」

健「……佳子、やっぱり俺にも大地は見えないんだ」
閃光が走る。

佳子「……！」
佳子が大地に向き合う。

大地「僕は、お母さんにしか見えないのかな」
雷鳴。

佳子、首を横に振って強く否定する。

佳子「そんな訳ないじゃない！」

大地「僕はどうなってしまったのかな……」

佳子「大地、母さんは、ずっと、ずっとお前と一緒にだよ」
大地を抱きしめる佳子。

薫「誰と一緒になのよ！」

大地「母さん……」

薫「いいかげん現実を見なさい！」

佳子「……！」

薫「大地君は、大地君は、死んだのよ！」

稲妻が走る。

一拍して、激しい落雷の音。

一瞬にして脱力して倒れる大地。

佳子「(悲鳴)ギャーツ〜！」

大地にすがりつく佳子。

佳子「大地！(絶叫)」

稲妻！さらに大きな落雷の音。

暗転。

しばらくして部屋が明るくなる。

長い静寂の中の四人……

佳子の手の中には熊の人形。

佳子「(手の中の人形を見つめて)これは・・・」

健「大地が死んで、お前はその現実を受け入れられなかった。だから葬式も拒んで、大地の死を受け入れなかったんだ」

佳子「・・・」

健「俺も体の一部が無理やりもがれた気がした。やっと手にした大切な宝物を失ったんだ」

佳子「健さん・・・」

博「・・・」

健「俺は、大地と心が通じていると信じていた・・・心にぽっかり空いてしまった暗闇を見つめながら、なぜ大地の悩みを聞いてやれなかったのか、なぜ大地の死を防げなかったのか、俺もずっと苦しんでいたんだ。そして、ふと気が付くと、お前は別の世界に行ってしまった」

佳子「別の世界・・・」

健「ああ、お前は、死んだ大地と話し始めていた。俺のことなど見向きもしないで、ずっと大地と話し続けていたんだ」

佳子「・・・」

健「俺は、そんな生活に耐えられない。これからずっと現実から逃げて暮らしていくなんで、俺にはできない・・・」

佳子「・・・」

健「悲しいのは、お前だけじゃない。俺は、俺はどうしたらいいんだ！」

佳子「あなた・・・」

健「佳子、俺はお前まで失いたくない。早く現実に戻ってほしかったんだ。だから、お前が大地の死を受け入れるために、最上さんに頼んで、大地の死の直前をもう一度再現してもらった」

佳子「お芝居だったの・・・」

健「ああ、病院の大倉先生と相談したんだ。あの日と同じ現実と向き合って、大地が入院した病院に行って、先生にもう一度大地の死の状況を詳しく説明してもらえば、お前は『大地の死』を受け入れてくれる、そう思ったんだ。まさか最上さんたちの前で、大地と話し始めるとも思ってもみなかった」

佳子「・・・」

博「息子の和彦のために、引き受けました」

薫「あなたを騙すつもりはなかったの」

博「でも、女房が酔っぱらって、あなたを余計傷つけてしまった。申し訳ありません」

薫「ごめんなさい。こんな大事な時に、自分を失って、取り乱して、イジメが原因だと騒がれたくない一心で、あなたに酷いことを言ってしまった・・・本当にごめんなさい」

佳子「私は、ずっと願っていました（毅然と）」

薫・博「・・・！」

佳子「イジメが原因であってほしいと」

薫「そんな・・・」

佳子「イジメが原因なら、（ゆっくりと博たちを見る）あなたたち親子を憎むことができる、恨むことができる」

薫・博「・・・」

佳子「ずっと、苦しみの持って行き場がなかったの・・・怒りや後悔が、自分にしか向かわないのよ！どうして、どうして私だけがこんなに苦しまなければならないのよ！」

健「佳子、俺だって」

佳子「でも、分かったのよ！あなたたちがイジメを認めたところで、大地は戻ってこない、大地は二度と戻って来ないのよ！」

薫・博「・・・」

佳子「私の悲しみは、永遠に空回りし続けるのよ・・・」
佳子が座り込む。

健「永遠に・・・空回り」

薫・博「永遠に・・・」

佳子「・・・眠れないの、ずっと眠れないの」

健「佳子・・・」

博「・・・」

佳子「切なくて、苦しくて、堪らなくて・・・ずっと泣いていた。でも不思議ね。悲しすぎると涙もでないのよ」

薫「佳子さん・・・」

佳子「どうしようもなく、胸が締め付けられるように苦しくて、死んだ方がましだと思いつながら、一人になる夜が怖かった。怖くて、目も閉じられないの・・・でもフツと時間が飛んでいる時があつて。そうだ、すべてが夢だったんだ。そう思つて、ホツとして、夜中、大地の寝顔を捜しに行くと、大地の

遺骨にたどり着くのよ。それを見て、息が出来なくなつて、胸を掻き毟りながら、必死に悲鳴を上げて……これは夢だ、早く夢から覚めて！と願うけど、覚めない。どうしても夢から醒めないのよ。そう現実が、悪夢なのよ」

博「現実が悪夢……」

佳子「地獄の日々だったわ……」

薫「……」

佳子「……でもそのうち大地と話ができるようになって」

健「夢なんだ。佳子、それが夢なんだ」

佳子「夢でもいい……大地に会えるなら。現実に戻って何になるの！大地のいないこれからの何十年、どうやって生きていけばいいの」

健「……」

佳子「あの日、大地が学校に行く時、疲れた顔をしていたの。心配になって、大丈夫なのって声かけたら、少し微笑んで『うん、お母ちゃん行ってきます』って言って出かけたのよ。それが大地との最後の会話になってしまった……今でもその時の『お母ちゃん行ってきます』と言った大地の声が頭の中で聞こえるのよ」

薫「ごめんなさい」

泣き崩れる薫。

博「……」

薫「母親なのに、あなたの苦しみ、大地君の苦しみを分かっついていませんでした。分かるうともしなかつた……」

佳子「あの時、学校に行くのを止めていたら、もっと大地の話を聞いてあげていたら、もっと大地のことを知っていたら。そう思うと自分の胸を掻き毟りたくなるの。私は、我が子を見殺しにした本当に情けない母親……」

健「そんなに自分を責めるな」

佳子「あの子は、まだ十歳だった。十年しか生きてないのよ！もつと、もつと色んなことを経験させたかった。もつとかまつてあげればよかった。もつと、もつと優しくしていればよかった。後悔してもどんなに後悔しても、あの子はもういない……もう、取り返しがつかないのよ！（絶叫！）」

泣き崩れる佳子。

健・博・薫も泣いている。

薫が佳子に縋るように土下座して、

薫「…どうか私たち親子をお許しください」

博「自分たちは、息子のことばかり考えていた愚か者です。取り返しのつかないことをしてしまいました。本当に申し訳ありません」

薫「もつと真摯に息子と向き合っていたら、こんなことには…」

博「息子のことを何も分かっていなかった情けない父親です。分かる努力もしなかった。今更悔やんでも悔やみきれません…」

薫「私こそ母親失格です…」

博「私たちは、(薫を見る)離婚することで、現実から逃げようとしていました」

薫「(博を見る)…」

博「私は、あなたの哀しみを知って、はじめて自分たちの犯した罪の大きさに気付きました」

薫「ごめんなさい」

博「私たちは、この大きな罪を背負って、親子三人で生きていかなければなりません。背負いきれない罪を背負って、一生贖罪をしなければなりません」

博と薫が床に頭をつけて謝っている。

二人を見つめる健。

佳子「最初は意識があつたのに、検査中に容体が急変して、皆が駆け付けた時はもう亡くなっていた。でも大地の体はまだ温かかった。今でもこの手にあの時の温もりを感じるの」

健「静かに眠っているようだった」

佳子「田舎のおじいちゃんが、しばらく見ない間にこんなに大きくなつたんだって、大地の体をさすりながら泣いていたわ」

健「大地は、おじいちゃんの影響で、鉄道が大好きだったな」

佳子「そう、鉄チャンだったわ。4年生の夏休み、あなたに、秩父でSLに乗せてもらって大喜びだったわね」

健「秩父鉄道のパレオエクスプレスだった。これが憧れのC58363(シゴハチサンロクサン)だった、大はしゃぎだったよ」

佳子「(健を見て)あの時、はじめてあなたのことをお父さんと呼んだのよ」

遠くで微かに汽笛が聞こえ始める。(ポー)

健「嬉しかった。はじめて本当の親子になれた気がした……の
に（嗚咽）」

佳子「あの時の鉄道模型が大地の一番の宝物だったのよ」
遠の汽笛が聞こる。ポー、ポー。

一同「……！」

遠くから汽車が次第に近づいてくる音。

健「何か聞こえないか？」

佳子「……」

博「確かに何か聞こえる」

薫「あなたにも聞こえるの？何これは？」

舞台が暗くなり、一面に星々が輝き始める。

驚く一同。

銀河のイメージ。

博「わ！何だ！これは！」

薫「あなた！どうなっているのよ」

次第に大きくなってくる汽車の音。

近づいて来た汽笛。

汽車の音が轟音となってくる。

舞台の奥、銀河の彼方から小さな光が近づいてくる。

その光が、だんだん大きくなる。

それが、大地の憧れのSLと分かってくる。

健「あれは、大地のC58363じゃないか」

佳子「大地の……」

舞台は一面スモーク。

轟音と共に、雲（スモーク）の中から、巨大なSLが登場。

佳子と健は、驚きの余り、茫然としている。

薫と博は、腰を抜かさんばかりに驚いている。

舞台から複数のスモークが吹き上がる。

SL（C58363）が停車する。

『お父さん、お母さん！』『お父さん、お母さん！』天空から
声がする。

スモークの中から大地が登場する。

大地「お父さーん、お母さーん」

佳子・健「大地！」

大地が両親に近づいてくる。

驚きの余り、動けない薫と博。

見つめ合う大地、佳子、健。

大地（笑顔で）十年間、ありがとうございました。僕は旅立ちます（両親にお別れが言える喜び）

薫「大地君なの……」

博「そんなはずは……」

大地「お母ちゃん、大好き！お母ちゃんと家にいる時が、一番幸せだった」

佳子が大地を抱きしめる。

佳子「大地、大地、もつとずっと……（声にならない）」

佳子の眼から涙が溢れてくる。

大地「お父さん」

佳子も健を見る。

大地（健に近づく）お父さん、ありがとう。僕が大好きなC58 363（シゴハチサンロクサン）で、旅立てるのは、お父さんのおかげです。本当にありがとうございました

大地、健に深々と頭を下げる。

健「大地……」

大地「家族で行った沖縄旅行、楽しかったな」

健「すまなかつたな、甲斐性のない父親で。もつと、もつと家族で色んな所へ行けばよかつた……」

大地「最後まで迷惑を掛けてごめんなさい。親孝行できなくてごめんなさい」

健「いや、お前はいい子だ。最高の俺の息子だ」

健、泣きながら大地を抱きしめる。

汽笛がポールの鳴り、出発を告げる。

健「大地、行かないでくれ！」

大地「僕だって、ずっと、お父ちゃんとお母ちゃんと一緒にいたい！」

佳子「大地……」

大地「でも、もういかなくちやならないんだ……」
出発を急かせるSLの蒸気の音。

薫「大地君、お願い、行かないで！」

博「行かないでくれ！頼む、行かないでくれ！」

最上夫婦の叫びをかき消すように汽笛がポーツと大きく鳴る。
動き出す蒸気の音。

健「大地！」

佳子が大地と向き合い、そっと大地の肩を抱く。

佳子「大地」

大地「お母ちゃん……ごめんなさい……」

佳子、大地を見つめ、優しく首を振る。

佳子「大地……ありがとう」

大地「お母ちゃん……(声にならない)」

佳子、大地を見つめ優しく頷く。

佳子「大地、ちよっと待ってね」

佳子は荷造りしていた鞆に駆け寄り、何か持って来る。

佳子「大地、この子連れって行って」

熊の人形『プー』を大地に手渡す。

大地「僕のともち。お母ちゃんありがとう」

大地が無理に笑顔を作り、佳子を見る。

涙で頷く佳子。

舞台からスモークが噴き出す。

汽笛がポーツ、ポーツと大きく二度鳴る。

健「大地！！」

大地「明るく）またきつと会える日が来るよ。その時まで、お父ちゃん、お母ちゃん、さようなら（手にした熊の人形を振っている）」

佳子・健「大地！」

大轟音と共に、SLが動き出し、大地が雲の中を去っていく。

見送っている四人。

銀河の世界が消えていく。次第に遠ざかる汽車の音。

最後の別れを告げる汽笛ポー、ポー。

汽笛の方に目を向ける佳子・・・

元の部屋に戻っている。

『誰か私を』（コトリンゴ）が静かに流れている。

十字架が光始め、徐々に部屋が光に溢れる。

虚脱した佳子座り込む。佳子を気遣う健は、そっと佳子の肩に手を置く。

苦悩する最上夫婦も少し寄り添う。

溢れる光の中にいる四人。

部屋の明かりが十字架に吸い込まれ、部屋は暗くなり、十字架は輝く。

暗闇に浮かび上がる光の十字架。

荘厳な教会の鐘が鳴り、唄はその鐘の中で消えていく。
十字架も鐘の中で消えていく。

静かに暗転。

終